

当たり前前の幸せ

一年

多和田

あかり

みなさんは、一型糖尿病という病気を知っ

ていますか？すい臓でインスリンを作っ

る細胞がこわされて、インスリンを出さ

弱まったり、インスリンが出なくな

る病気です。体のインスリンが不足し

ので、インスリン注射の治療が必要に

す。原因不明の病気です。一昨年の春、

この病気を発症しました。この経験から、

たり前のことか、当たり前前じゃなくな

さを知りました。

五年生も終わりがけの三月、

「疲れているように見えるけど、大丈

「ふうふうしてるんじゃない？」

「あかり、月か死んでる、」

など、父母や先生、友だちによく言

うになりまして。私は特に体の変化を

なかつたので、「どうしているん

心配されているのだらう」と不思議な

診させてもらったそうです。

病院で血液検査をし、結果見た先生は、

「あかりさん、あなたは一型糖尿病です。重

症化していらっしゃるので、すぐに入院して下さい。

とおっしゃいました。私は、その言葉を聞い

ても意味が分からず、ホーとしていました。

気が付くと私は集中治療室にいました。両手

に点滴がかけられ、体がぐたりして一人で立っ

ことすらできなくなっていました。私の体

はどうしちが、たの不安で涙が溢れまし

でした。が、いつも通りに過ごしていました。

ある日、朝の体重測定をするとき、

「減ってました。熱はなにも、私は体

がだるい感じがしました。それを見た母は、

「さすがに、これはおかしい。」

と言いつつ、私を連れて病院へ行きました。

コロナの時期だったので、病院は熱がな

ら受診しないように言われていました。しか

し、「今回ばかりは、娘の命に関わるかもし

れない。」と思っ、た母は、無理にお願いして受

た。数日後、普通病棟に移り、本当の治療生活が始まりました。

毎日食前に血糖値測定とインスリン注射、

就寝前にもインスリン注射を行いました。

さし頃から針を見るのも嫌いな私は、一日七

回以上も体に針を刺すことが怖くて嫌で仕方

ありませんでした。その度に、ぐずったり、

泣いて抵抗してしまいました。

先生、私の病気は、いつ治るんですか？注

射はもう嫌です。

「あかりさん、落ち着いて聞いてね。君は、

この病気と一生付き合っていく必要がある。

残念ながら、君の体の中ではインスリンが

出ていないんだ。

私はその言葉を聞いて、絶句しました。「一

生注射して過ごす？嫌だ！私、何か悪いこと

した？何で私が病気になるの？」という気持

ちで、「はい、はいになり、一時間以上泣きました。

「あかり、体の調子が悪いのを気づいてあげ

られず、ごめんね。もっと早く気づいてい

戦しよう。と病気と向き合う覚悟を決めまし
 た。その後の入院生活は、たまに不安で泣いた
 り、弱音を吐く事もありました。が、病院の先
 生や看護婦さん、院内学級の先生や私と同じ
 ように病気と向き合っていて、る友だちと話すこ
 とで、一人じゃないと気づき、落ち着いて過
 ごせるようになりました。
 入院中、私は院内学級に通っていていました。
 オララインで県内の院内学級の子どもたちと一
 らば、。もうこうなったら、病気と向き合いい仲良
 く付き合おう。薬の力を借りたら、普通に
 生活できる。やりたこと全部できるぞ！
 薬ってありがたいな。自分で注射すること
 が嫌なら、お父さんが毎回注射打ってあ
 げるよ。お父さんは、痛く打つけど、いっ
 っなんてよ。痛くないでよ！
 涙でぐちゃぐちゃの顔で父母と話した私でし
 た。が、父の言葉で「病気と共に、何事にも挑

に勉強することでもできました。休み時間には
 「早く普通に学校に行きたいなね。学校に行
 ったら何したらい？」
 「かっは、野球でしょ。走りたいな」
 「お友だちをいっはいい作りたいい！」
 いつも、学校へ行つたときの話もみんなでし
 ていきました。最近まで通つていた学校、たま
 に面倒だったたり、休みたか、たはずなのに、
 早く戻りたくて仕方ありませんでした。
 「CMで普通の上等って言う、てたけど、私た
 ちにとつて普通に友だちと学校に行つたり、
 遊べることで、上等で幸せだよ。学校
 に行つてるときは分からなかつたね」
 「幸せ」という言葉を聞いて、私はいっとし
 ました。「普通の生活の中に小さな幸せがい
 っぱいある。どうして今まで気づかなかつた
 んだらう。もつたいいこととしてたな」と思
 い、その後の入院生活では、食事が美味しく
 て幸せ、お花がきれいに咲いて幸せなど、小
 さな幸せを見つけて過ごしてりました。

一ヵ月後、私の新学期が始まりました。登
 校しながら、私は今まで気づかなかつた小こ
 な幸せをたくさん見つけました。大好きな妹
 と手をつないで登校できたこと、飛行機雲が
 見れたこと、友だちが私の顔を見て涙を流し
 て喜んでくれたことなどです。入院前までは
 当たり前だと思っ ていたことが、実は、とて
 も幸せなことだと分かりました。本当に普通
 に過ごせること、て、小さな幸せの連続なん
 だと思ひました。

この経験から、私は「当たり前に生きるこ
 との大切さ」を学び、小さな幸せに気づける
 ようになりました。これからも病気と共に毎
 日の生活を大切に生きていきたいです。

ほんとうの優しさとは

二年 村吉 梨花

何不自由なく、学校に通い挑戦したいことに取り組む私は、本当に幸せが毎日を送っています。でも明日何かあった場合、私に障がいと向き合うことになった時、私はどんな毎日を送るんだろうと、ふとよぎりました。それは、パラリンピックのバドミントンを見ていた時のことです。車椅子バドミントンの梶

原大暉選手は中学二年生の時、突然の事故で

車椅子生活になりました。と、アサヒニサーが紹介しました。そうなんだ、私もあつとこんな毎日があたり前ではなく、突然明日から人生が変わるかもしれないと思いました。そんな時、中学一年生の職場体験を思い出しました。

私は、職場体験で障がい者施設に行きました。その障がい者施設では、普通の小学校に通えない、特別支援学校に通う同年代の子どもが集まる施設でした。私は普段、障がいを

もっ人と接する機会がなかったのでも、どう接するのかが正解なのかわかりませんでした。また、無意識のうちには誤った偏見や勝手なイメージから、障がい者を「怖い」と感じていたこともあり、あまり気が乗らない中での職場体験でした。

職場体験初日、大きい声を出したり走り回っていたいる男の子がいました。公園で見かける小学生と変わらないうちに、「障がい者」というだけで、なぜか更に「怖い」と思いま

した。緊張と不安が入り混じり、笑うことも話しかけて会話をすることさえできませんでした。そんな私の様子を見た職員の方に、「ここに来ている子ども達は、見えないうちに話せない障がいを持っている。だからこそ、その場の雰囲気や敏感に感じてもらおう。私たちが日楽しいと思っただけじゃないと、不安が相手にも伝わり、てしまう」と、言われました。それを聞いても、私にはどう行動し、接したらいいのかわかりませんでした。あまりヒート

ニなく、障がい者だから繊細。とにかく、
 他の人よりももっと優しくなければいけな
 い。と、勝手に思っ込んでいました。
 2日目には、職員の方と利用者の児童と公
 園に行きました。その児童は、自分の力で立
 つことができず、車椅子を利用していました。
 私も初めて見た時は驚きました。正直、私は
 公園に着いた時、とても周りの目を気にして
 いました。公園にはたくさんのお保育園児がい
 て、不思議そうな目でじっと見られていたの
 を覚えています。写真を撮る時には、私たち
 の周りにたくさんの方が集まり、私は「今才
 ぐにでもここから離れたい。恥ずかしい」と
 思いました。今、思い返してみると、私が感
 じていたことは差別になっただけだと思いま
 す。その日のおやつ時間では、一人でおやつを食
 べている女の子に声をかけて一緒に食べまし
 た。そのとき、全身で喜びを表現し、ニコニ
 コしてとても嬉しそうに笑顔は、私も勇気を
 もうくれました。その子が、ずっと一人で食

よりも、誰かと一緒に食べる方がおいし
 と、感じてくれた。ところが私は何よりも優
 しい気持ちになりました。

最終日、私が小学校低学年程の女の子と遊
 んでいるとき、急に何か話しかけてきました
 た。私は全く理解ができず、ただその場で見
 ているだけでした。それは職員の方が来て、
 目を見てひとつひとつ、ジェスチャーを加え
 た。私が話を聞いていました。それを見て、私
 は漸く自分の考えが間違っている事に気がつ
 きました。

私は、障がい者を理由に、障がい
 者を私とは違う「特別な存在」として扱
 いました。職員の方々は、ひとりとりを個
 人として理解し、尊重していました。他にも
 何をするに對しても、相手を焦らせたりする
 ことなく、むしろ相手のペースに合わせ、い
 ました。相手が伝えやすく、表現しやすくで
 きるような、受け入れやすい態度で常に笑顔
 で接していました。

私が障がい者に対して行って
 いた「優しさ

努力かし、困難を乗り越え競技に挑む姿は、誰よりもかっこよく輝いて見えました。

私は、テレビやニュースなどの限られた情報に惑わされず、自分の経験から気づくこと

ができた考えを軸に行動していきたくて思います。そして、自分とは違うからといって、

その人のすべてを否定したり、区別したりする人がいなくなってもいいです。

優しさとは、表面上の行動ではなく、相手への信頼と理解によるものだと知ることもできます。

ました。お互いを尊重し合い、支え合う関係を築くことで、今よりも、みんなが安心して

優しく夢を叶える社会になると思います。明日、私の隣りに目の不自由な方がいれば笑顔

で咲く、向日葵の様子を伝えます。耳の不自由な方がいければ、一緒に潮風を感じたいです。

時には、同じ目線でじっくり歩き、未来に向かっ、中々くり進む世の中を指すこと

がほんとうの優しさだと思います。私はそんな未来をつくらせていきたくて、